

俳句

金子兜太

俳句 短詩形の今日と創造

著者金子兜太

発行者阿部礼次

発行所北洋社

東京都千代田区富士見二ノ二ノ一

印刷精興社

製本牧製本

発行日昭和四十七年七月十五日

定価千八百円

限定千二百部

© T. KANEKO 1972 Printed in Japan

目次

俳句入門

I 新しい美の展開

- 1 戦後の俳句 9
- 2 女性たちの俳句 42
- 3 風土に根づいた俳句 53

II 題材と言葉

- 1 季語とは何か 67
- 2 題材は広がる 73
- 3 約束の解体 87
- 4 肉体・時間・土 92

III 描写からイメージへ 手法の展開

- A 描写が素朴なとき——〈描写1〉 113
- B 描写に主観がすこし顔を出したとき——〈描写2〉 117
- C 描写が主観によって押しつけられたとき——〈描写3〉 126
- D イメージが素朴なとき——〈イメージ1〉 132
- E 完成したイメージ——〈イメージ2〉 140

一般の句 II	263
中学生の俳句	257
一般の句 I	209
俳句鑑賞	
V 存在の純粹衝動 俳句は詩である	194
6 視覚への訴え	187
5 切れ字とその効果	176
C 口語と五・七・五のリズム	173
B 音節と文節の協和と不協和	165
A 「はみだしたものの」の魅力	158
4 字余りと字足らず	158
3 五・七・五のリズム	154
2 短さの魅力	151
1 人間は「型」を求める	146
IV 俳句の形式とリズム	146
F 実験的なイメージ——「イメージ3」	141

V 存在の純粹衝動 俳句は詩である…………… 194

俳句鑑賞

高校生の俳句

321

一般の句Ⅲ

328

兜太〈旅の句〉・50

北海道

373

津軽半島十三港

375

津軽半島竜飛岬

376

下北半島尻屋崎

377

男鹿半島

378

秩父

379

木曾福島

380

越前海岸

381

神戸

382

長崎

383

鹿児島・桜島

384

あとかき

385

俳句

短詩形の
今日と創造

俳句入門



I 新しい美の展開 今日の俳句を鑑賞する

1 戦後の俳句

あなたと呼ばば、あなたと答える山のこだまのように、俳句と呼ばば、わび・さび・しおりと答える人が、いまでも少なくない。その人たちにとって、俳句は、しょせん遠き古き時代のものであるのかもしれない。

しかし、実際には、俳句は、時が進むにつれて、さまざまな美を展開してきた。ことに、昭和の時代にはいつてからは目を見張らせるものがある。そして、とくに戦争後——私が昭和後期と呼ぶ時期——のものは鮮度十分である。それらのなから私の好きな作をあげて、その成り立ちと美しさを語ってみたい。

暗闇の眼玉濡さず泳ぐなり

大阪に住む鈴木六林男^{むりお}の作で、昭和三十五年に出た彼の句集『谷間の旗』に収められている。

私はこの作を読むと、すぐ京都のインクラインを思い浮かべたが、どうも、場所は、わりあいに人家も多いところの運河か沼のように思えてならない。すくなくも、山のなかの淵とか海の岩間という感じがしない。それでいて、そこは真っ暗でないといけない。水のなかなど絶対にのぞけないくらい真っ暗で、手と足にくる水の感触だけがはっきりとある状態でないといけない。

つまり、この作は、仙人とか隠遁者のものではない、ということだ。毎日を大いに苦闘している生活者が、ある日、ふとした機会に、水にはいって、汗をおとし体を冷やそうとしたときの作なのである。だから、キツと見開いた目玉を闇に据えて、がっちり泳いでいるのである。「眼玉濡さず」というのは、そういう意思の現われである。作者の側からいえば、そういう言い方で意思を表わそうとしたのである。

いま私は、生活者と言ったが、これでは、じつは不十分である。正しく言えば、若い生活者と言うべきである。というのは、暗闇に目玉を据えて泳ぐこの人の気持のなかには、生活者の意思という言葉だけでは済まされない、もっと複雑なものがあるからなのだ。たとえば、「暗闇の眼玉」というぐあいに、とくに暗闇を強調したところには、鬱々たる不満——それも、生活上の不満というよりは、もっと肉体的なものが感じられる。体じゅうで、うずうずしている感じで、こんなときは、世の中の権力者など、面をみるのもしやくにさわる、という気分にもなる。反権力の気分だ。

それから「濡さず泳ぐなり」と、いさぎよく断定するところあたりには、ひどく純潔な感情を感じる。目玉というものは、みずみずしくて、きれいなものだ。それだけにおそろしいものだ。それを絶対に濡らさないように、水から上にはっきりと据えて、水しぶきを立てないようにゆっくりと泳ぐ様子——そ

れを想像すると、目玉はいよいよビロードのように潤いを増し、光り、情熱にかがやいてくるような感じになる。「濡さず」と「なり」とが、なんとも言えない魅力的な語感だ。

したがって、まとめて言えば、この作品の持っている美しさは、疲れもあり、多少の退廃もあるが、それらをひっくりかえした若い純潔な肉体が、肉体によって——それこそ体をはって——自分の意思を示したところにある。教養とか学問とかいうものの翳をまるで感じさせない、むきだしの感情と意思で押し通している、と言ってもよい新鮮さである。

果樹園がシャツ一枚の俺の孤島

私の作をあげさせてもらう。東京都杉並区の今川にいたころの作品だが、以前はここは杳掛町といった。旧称のほうがずっとよい。杳掛というのは昔の宿場にちなんだ名だそうである。青梅街道に近い武蔵野の小さな人家の集落が浮かび、いかにもなつかしい名だ。移転したばかりのころは、杳掛時次郎の杳掛です、と人に紹介したものだ。

この近辺、果樹園があった。梨の木で、花の時期、袋をかぶった実の時期と、それぞれに特徴があるが、私は、実の時期の重なり合った葉と、その下にいて触れる強い太陽の匂いが好きだ。横に出て見上げる空は、ぎらぎらした青空だ。

そんな時期にできた作だが、シャツ一枚の身軽な気持と、緑の果樹園は、私を解放してくれる。果樹園が自分の城のように思え、城主のように自由になる。実際にも、果樹園の一つ一つははっきり区切られているから、城とはいえないまでも領地といった感じはある。そこに、大きな顔をして、自分がいる。

この気持は、裏がえすと、他から隔絶された自分の領域について、自分の孤独を謳歌している気持でもある。この果樹園の陸の孤島であり、自分はその孤島の主、孤独に羽搏く不逞の男といった気分である。しーんとしみるような孤独感が根にあるが、葉のいきれと太陽の熱でたくましく膨張して、孤島に君臨する者の快さを味わうがごとくである。「俺の孤島」という倨傲な言い方は、その君臨の快味の現われ——というより、その快味の「主張」にほかならない。

私はいま、〈孤独〉という言葉を使った。孤独とは何か。私たちが生きてゆくためには、それなりの積極性が必要である。獣は餌食をとるために全力をかけ、餌食となるものは身を守ることに全力をかけている。これらは本能的なものだが、人間の場合は、もっと複雑である。人人の関係のなかで、自分を生かしてゆくための本能以上の努力がなければ、生きてゆくことにはならない。その努力をささえるもの、それを私は「意思」と呼んでいる。

むろん、その内容はさまざまだ。たとえば、ドストエフスキの小説『未成年』に、こんな話があった。ボルガ河のほとりに乞食が死んでいたが、その衣服の裏側には、いちめんに紙幣が縫いつけてあったというのだ。彼は、乞食をして街を歩きながらも、いつも金持の気持にひたり、自分に金銭を恵むものを、心中では軽蔑していたにちがいない。着飾った金持でなく、乞食をしている金持こそ、ほんとうの富豪、世の中の最大の権力者であると、自負していたにちがいない。

これは一見まことに消極的だが、一面から言えば無類に積極的な生きる意思であって、生きてゆくことへのみごとな計算すらある。大臣になったり、会社重役になったりするために実力を振るうことより、はるかにみごとな意思かもしれない。

しかし、一方では、そのような各人各様の意思は、その人を孤独にする。意思は、身に課せられ、叱咤激励の鞭となるわけだから、その人を縛るぐらいでなければなるまい。つまり生きるということとは、もともと自由なことではないのだ。したがって、おたがい、他人の意思を受け入れることより、反撃し合うことのほうが普通である。反撃の合間にもされる一定期間の真空状態だけが、人人をくつろがせるが、それも一時的であって、しょせんは、他人に対しても孤独と言うほかはない。

つまり、わが身を縛り、他人から孤立して——この二重の孤独のなかで、私たちは生きるしかない、ということである。その二重の孤独に耐えられないものは、意思を放棄し、また孤立を愚かと思うものは、他の人人の意思のなかにある共通項を求めて、連携を図ることで孤独を解消しようとする。

だが、たとえ、他の人人と連携できたとしても、やはり孤独を解消することはできない。それくらい人間という奴は業の深い、エゴ（自己）の塊である。自分に対する孤独——意思による拘束感からくる孤独感——は、なかなか消えるものではない。

そこで、今度は、しやにむに孤独をバネとして生きるしかない。孤独に徹することにはちがいないが、それに埋没するのではなく、バネとして活用する——つまり栄養にすることだ。私の孤独への君臨、そして六林男の「眼玉」を濡らさぬ潔癖ぶりも、それである。糞をくらえ、という居すわりであり、自己主張である。

これが、古今を問わずへわれを、表現の世界のなかで主張させた理由であったわけだが、現在では、ことに、それが目立つ。

そして、その孤独の主張が強いほど、そこに、ある種の自信をとまって、連帯への呼びかけも現わ

れる。〈われ〉から〈われわれ〉へ、である。そして、君と、君に、でなく〈君へ〉である。戦争直後の、熱に浮かれたような連帯への衝動ではなく、最近では、じっくりと呼びかけ、結びあってゆく営みが現われてきているのは、その衝動と、その挫折のあとの孤独の体感によるものであると思う。したたかな孤独、そして、十分な連帯。

そこでまず、〈われ〉と〈君〉の接点をつぎのような作品に触れて、見てみよう。

友の死へ雨の裸灯でありたい俺

吉浜 青潮

ここでは、渾身で自分を示し、悔恨も悲嘆も、そして正当性も、すべてをさらけ出すのである。友の死に向かって自分の孤独を投げ、会話し、それによって、友も自分も癒そうとする。しかし、けっきょくは雨の裸灯のごとく、ずぶ濡れに赤裸々に、自分の孤独がむきだされることに止まって、渾身のむなしさが残るのであろう。しかし、作者は、それをよしとして構える。

怒らぬから青野でしめる友の首

大阪にいる島津亮の作品である。

われ・俺——といった自己主張の言葉が多用されてきている事実を背景に、私は、この作を提示しておきたい。同性愛ではないか、と思う人はそれでもよい。そう言っても、それほどまちがいはないものがある。

青い野で、作者は友だちの首をしめる。その理由は「怒らぬから」。まったくふざけた話で、首をし